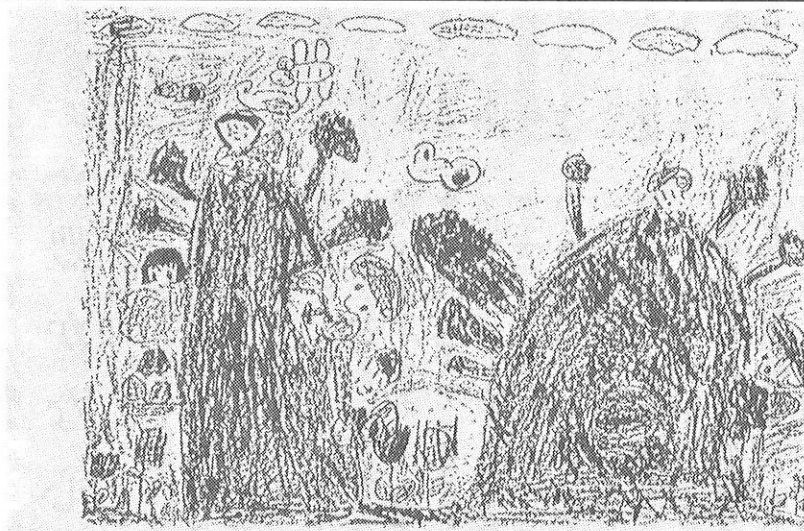


光の子

発行／社会福祉法人 光の子どもの家
編集／光の子 編集委員会
〒349-11 北埼玉郡大利根町砂原277
TEL／0480-72-3883
振替／東京3-128022
印刷／(株)ドモン企画



お山のゆめ 一年 たけうち けい子

残暑お見舞い

申し上げます

社会福祉法人 光の子どもの家

女は強い、だが (ヨハネ・十九・二六)

理事長 福島 勲

イエスの一二才の年の過越の祭り以後、聖書に登場しないヨセフは、早死にしたと言われている。割の悪い男のように思えてならないのだが、カトリック側の見方によると、これほどの果報者はいない。聖母マリヤとキリスト・イエスに見着られて死んだ世界でただひとりの男だという。

マリヤをカトリックの人たちのように敬うことはできないが、謙虚で優れた婦人であったことは確かであり、受胎告知のときから、イエスを信じるキリスト者第一号である。

マホメット夫人も、マホメット教信者の第一号といえる。

メッカの有福な商人の妻であったハディースは、未亡人となつて四十才のとき十五も年下のマホメットと結婚した。アラブ社会の宗教や習慣にノーといったマホメットへの迫害はきびしかった。

時には挫け、倒れ失望する夫を

励まし助けたのは彼女であった。女の力は大きい。

われわれの教会もまた施設も婦人たちに負うところ大である。

一家に遊女もねたり萩と月

有名な芭蕉の句、セクシイな感じだが、その実、まことに問題を投げかける句である。親不知の近くの市振の宿に、伊勢参りをすると遊女が泊まりあわせた。

見えかくれて従っていくから衣の上の仏の慈悲によりすがらせてほしいと哀願する。

芭蕉は不憫と思うが、自分たちは気ままな旅だ、お先にどうぞといて別れる。

哀れさしばらくやまざりけらし、とおくのほそ道にかいてる。

このような女の救いは、まことにむずかしい。芭蕉ならずとも、福音をかざし福音に仕えるわれわれも、はたと行き詰まる。

スカルの井戸端で、イエスはサマリヤのこの種の女を救いに導か

れた。

イエスは十字架の上から、残していく母マリヤを弟子のヨハネに託した。マリヤはオリブ山麓、ゲッセマネの園近くで、ヨハネにとられて六十才で死んだといわれている。(別の話では七十二才とも迫害にあつてエペソにのがれそこで死んだともいわれている)

イエスには兄弟はヤコブのほか三人と、姉妹がすくなくとも二人はいた(マタイ・二三・五五)だのになぜ、イエスは母の最後をヨハネに託されたのだろう。そのわけは知らない。

ヤコブはエルサレム教会の指導者(ガラテヤ・二・九)で紀元六三年ごろ殉教している。

他の兄弟姉妹はどうしたのか。老いの身で子どもたちと共に暮らせなかったマリヤにも人知れぬ苦勞のあったことは想像されよう。所詮、女は強いといえどもまた人である。人であるからには弱いのである。男も女も、強そうでもそうでなくても、キリストにあつてこそ生きる意味を与えられる人生なのである。

豊かな心

施設長 今関 公雄

毎年のことながら八月を迎えて平和への想いを新たにします。あわせて真の豊かさを再考します。

この点で次の一節は私の心に深くしみみます。「いまの人はみんな人間の命を食べて生きている。戦争で死んだ人の命を食べて生きている。戦争に反対して殺された人の命を食べて生きている。」(灰谷健次郎・兎の眼)

ここで私たちは、いまの自分の命が歴史性をもち、かつ連帯性をもつことが示されている。いまの自分の命が、単なる偶然性を超える世界で再解釈される。この私の生命が私ひとりの身勝手な私有物ではないとの視点が与えられる。むしろ、有名無名の多くの犠牲と代償があつて、私の生命が生起しているのである。

日本の戦後の繁栄が世界の注目を集めており、その背後に今次大戦での三百万余の戦死者が覚えられている。そして、その犠牲と遺

徳を偲び平和を祈念することは尊い。しかしこの時、二千万余のアジア諸国の戦死者が忘れられてはならないであろう。ことにその命が、日本の侵略戦争の犠牲であれば、なおさら忘れてはならない。

悔い改めと償いの心で、より丁寧な報恩の思いが必要とされる。

このような生命観があればこそ人類同胞の思いが生起するであろう。いたずらに、人間の生命を敵・味方に分断する、偏狭な国家主義を超克したものである。

ところで、この生命観は社会福祉の対象者理解にも大きな示唆を与えてくれる。つまり心身障害者など、社会的援助を必要とする発現率を約五%、また事故や社会不安、老齢などによる社会的援助の必要率を概ね五%と推定すると、この約一割の福祉対象者が社会共同体の連帯性の中でその位置を得るのである。

これまでの社会福祉理解では、

これら約一割の被援助者を、いわば例外的存在として、分離する捉え方が強かったように思う。ここから、五体満足で社会的強者の健全者が、社会的弱者の心身障害者などを援助するとの考え方が支配的であったといえよう。

たしかに、目に見える部分ではそのように理解される。しかし、私が引き受ける可能性のあった重荷を、心身障害者などの人々が身代わりに担ってくれたとの考えの方が、より真実に近いと思う。

単なる運命論や因果応報的な福祉対象者の理解は、個人責任に帰着する。そして、この考え方はわれわれを分断して止まない。

豊かな心とは、喜ぶ者と共に喜び泣く者として泣くとの連帯性の中にこそ見出すことができよう。福祉対象者の重荷を、共に分かち、共に担い合うとき、真の豊かさが生まれよう。私が負うべき重荷を、彼ら心身障害者などが、代わりに担ったとの共感的・生命共有的な人間観に、豊かな心を見続けようと思つて昨今である。

手の痺れ

永作 火童(俳人)

両手くびから指先にかけての痺れが始まったのは「がんセンター」を退院してからであった。

担当医にそのことを話すと

「よくそうすることがあります、すぐに癒りますよ。」

とまことに気軽にいうもので、私もそうしたものかと思つていたのだが、十日たつても二十日たつても一向に指の感覚が戻らないばかりか、痺れがつのりまるで他人の手のような感じであつた。

痺れは痛みとはちがひ我慢できないものではないが、話に氣をとられるとペンを落し、床にこぼれた小さなものも拾えない、新聞や本の頁も繰れない始末の毎日では

流石に苛立しさを押えきれず、つい怒りぽくなり愚痴もいう。妻は、「手の痺れなのだから、そんなに氣を痛まなくても——。」

「がたら嫌なんだよ。腫れたり色でも変っているなら別だが、これでは中風と見られたって仕方が

ないじゃないか。」

「そんなことはないわよ。誰でも何かあるんですもの、少しお思い過ごしじゃない。」

「君には私の気持ちなんか判りはないんだ。」

「どうしてそんなにひねくれた考えをなさるの、貴方らしくもないわ。」

「放っておいてくれ。誰が医者なんか相談するものか。」

麻痺のことになると捨鉢的な言葉になるのだが、或る日そううした思いに耐えられなくなつて

「こんな手なんかなければいいんだ。」

と怒鳴ってしまった。

当りどころのなさといえ大声を挙げても痺れがとれるわけでもなし、氣が晴れるでもないのに何ともやりきれない氣持が、おとな氣のないことをしてしまうのであつた。

こんな或る日、俳句仲間の一人

がギブスをした右手を首から吊つて訪ねてきた。

「一体、どうしたの？」

「それがバイクを避けそこなつて転んだのだが、その時思わず右手を舗道の段差のところへついて複雑骨折という始末さ。つくづく酷だと思つたね。」

苦笑いをしながら未だにリハビリに病院通いをしてのこと、着替えや入浴にも家人の手を借りなくてはならないことを散々こぼして、これからまた病院にゆくところだと話して帰っていった。

同じ手でも私の場合には使えないというのではなし、氣をつけていれば粗相もしないですむし、特別に家族の手を煩わすこともないのである。ただ痺れて氣持が悪いというだけに過ぎない。痺れるのが嫌で両手を切り落したらどうだろう。不自由どころか後でもっと辛い思いもしよう。

痺れのことを思えば確かに不愉快極まりないが、考え方を變えて見れば痺れるのは手があるからだだし、痺れると感じるのは生きている証拠でもある。生きていられた

のは痺れの元凶であるその薬で肺がんという難病が克服できた。そう考へてくると痺れは生命のある証しになつていようし、手のついている有難さともいえる訳である。骨折をした友人のことが動機になつて、痺れに対する考え方はかなりではなく、嫌なこと、苦しい事への対し方が大きく転換したといつてもよい。極端な表現をすると俗にいう「災い転じて福となす」というそれであり、災いと感謝は背中合わせにあるという考え方に変わったのである。

こうした自分なりのささやかな自省から始まつた心の持ち方と転換は、その後の日常生活の氣持を楽にし、穏やかさをもたらしてくれた。自然に痺れを苦にしないで過ごせるようになった。そして氣がついてみると嘘のように痺れがなくなつていったのだ。しかしそれは痺れが始まつてから丸八ヵ月も経つていたのである。この痺れに悩んでいた最初の二ヵ月は随分と長く感じていたが、それを意識しないで過ごした六ヵ月は不思議なほど短かつた。

虹の国から
楽しかった新がた

四年 森 光子

八月七日、待ちに待った新がたへ行く日になりました。車で四時間走って新がたに着きました。駅前のおそば屋さんの大きなざるそばは、一つのざるに四人前も入ってびっくりしました。

原田先生たちの所に着いてから少し遊んで、五時ぐらいいなくなってから、山ぎわさんという人のお家に行きました。夜ごはんを食べる時は、お家と同じようにおいのりして食べました。それからお祭りにいく予定だったけれど、おなかがいたくていけなかったでテレビを見ていました。次の日、八八会の日と十一時に会って、海に行きました。足を怪我していたので、海に入れないであきかんを波にむかって投げたりしていました。そのうち私も波に入って遊んでしまいました。いっぱい遊んで帰りました。おふる屋さんに行って体をきれいに洗いました。これでおふる屋さんは二回目で、夏き学校で

で行ったおふる屋さんに似ているなあと思いました。帰ってもう一度、倉ちゃんにぼうず帯をもらいました。足の怪我はもういたくありませんでした。夕ごはんを食べてから、みんなでお祭りに行きました。

私は新がた祭りのおどり方を覚えて、帰ってからみんなに教えてあげたけれど、むずかしくて覚えられないのは、ざんねんでした。お祭から帰ったあと、ふとんをして電気をかけて、大人のあたしがいなくなったあと、男の子たちが少しさわいでいました。次の日は帰る日です。わたしはざんねんなあと思ったことがありました。それは今日、花火が上がるのだそうです。山ぎわさんも「九日に花火が上がるんだけど、帰っちゃうからざんねんね。」私も本当にそう思いました。でも仕方がありません。帰る時に記念写真をとりました。ゼリーもい

いただきました。帰り道にゆうびん局によって、今朝みんなで書いた絵はがきをポストに入れました。早く着くといいのになあと思いました。それから私は眠ってしまいました。目がさめるとそこは大きな魚屋さんがたくさんあり、いっぱい人が買い物をしていました。

すが原先生たちは飲み物やお魚を買っていました。私もおみやげやジュースを買いました。

次によったのは、良寛さまの記念館です。駐車場から少し歩いてあと階段です。百何段もあったから大変でした。じんじゃみみたいなところを見ていました。そのとなりに一つ小屋がありました。のぞいたらそこには、わらなどがありました。

次にまた石だんがあって 下るのみなかなか大変でした。その下の方にお墓がありました。木の札がたおれていました。私が「だれがたおしたのかな。」と言いました。だれかたおしたのなら、もともとしてあげようと思っていたからです。

でも、すがのくんが、

「これわざとたおしたんじゃないの」

といったので、何かこわくなってきました。いそいで石だんを登りました。そして、もう一度じんじゃのような所からまた登ったので大変でした。

登っていくと立ふだがありました。そこには「ここから先、お金とります。」と書いてありました。そこへは行って、私がまっ先にぼうず帯を見つけてました。しばらく見ていたら、てっちゃんが出来て、お金を入れて見ていました。

それから記念館に入りました。良寛さまの本や書いたはい句などがありました。良寛さまの像もありました。休けい所にも良寛さまの像があって、そこにはさいせんもしてありました。そして、へびがそこにいたのでびっくりしました。誰かが石をへびに当てました。そこから先に行った所に良寛さまの家がありました。中を見て、こんな家で暮らしたのかと思いました。

良寛さまはともびんぼうでふ

とんしか持っていなかったそうです。ある夜、どろぼうが入ったのだそうです。どろぼうは取る物がないのでふとんを取ろうかと思いました。でも、その上に良寛さまがねているのでじゃまです。

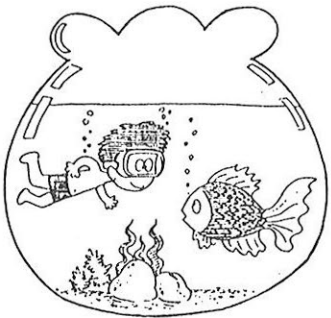
そこで良寛さまがわざとね返りをうつたそうです。こうするとどろぼうも取りやすくなります。これはすが原先生がお話してくれました。

私は、良寛さまを何てやさしい人なんだろうと思いました。またしばらく車で走り、サービスエリヤのレストランで昼食をすませました。おみやげを買いにいった人もいました。

また走りだしてしばらくすると困ったことが起きました。関越トンネルの方に近づくと、じゅうたになっちゃったのです。時間をかけてゆっくりゆっくり関越トンネルを通り過ぎました。

ようやく加須インターについてとても遅くなってしまったけど、きょうやラーメンでラーメンを食べました。

九時ごろようやく家に着きま



虹の国から

八ヶだけ

三年 山城 滋

佐久町のくらちゃんのお父さんのお家に、ごうごう会のみんなできのうからとまって きょうは八ヶだけへ登りました。

ロープウェイのまどから 外を見ると とってもいいながめでした。大きな石がいっぱいあるところを登りました。横だけの上まで四十三分ぐらいで登りました。ぼくは「すごい」とほめられました。何でかというよその中学生が「いっばいきて登っていました。それをおいこしてどんどん登りました。その中学生が「先生つかれたよ」「やすみたいよ もどろうよ」とか言っていたからです。またふたご池までうんと歩きました。歩いてがけのようなどころを登って 六時間も歩いてちゃんと帰ることができました。苦しかったけど また行きたいな。

現場から

輝きのかたち

その八

池田 祐子

子どもたちにとって別れはいつも突然でした。新年度を迎える前後に三人の職員が、ここでつくった子どもたちとの絆や仲間たちへのうめきのような言葉にならない思いなどのしがらみに、後髪をひかれながら去っていきました。

そして、四月二十八日、この日の夕食は、子どもたちには何のことだか事情は知らされていませんでしたが、何となく緊張していたいつもと異なり空気を感ぜていったようです。それは、いつもお家のダイニングルームで身を寄せながらしているのに、大きな食堂に準備されていたのです。夕食が始まる前に、信恵さんなどの大人から、開設以来一緒に原田家を創ってきた秋元保母とその担当の子どもたちが、佐藤家へ引越していくことを知らされました。

ある者は突然に、ある者は以前からの事情によって三人もの職員が去り、これからどうやっていく

のか、話し合いに話し合いを重ね私たちが出した結論でした。あまりにも突然のことで一志ちゃんや深子ちゃんは「みつよさんたちが佐藤さんちにお引越する。」ということは分かったよう

ですが、いま一つ消化しきれないようでした。食事の後もキョトンとしていました。でも、高雄君は揺れました。以前同じグループだった森姉妹と将司君です。特に将司君をへお兄ちゃんVと慕っていたのですから。夕食後はずっと森姉妹と将司君の部屋で過ごした高雄君。「お別れしてきたの。」と部屋に帰ってきて話します。そして「おやすみ」のあとで「ぼく、将司君が佐藤さん家に入った寂しい。」としきり泣き出す高雄君です。「光の子どもの家」に居なくなる訳ではないのですが、同じ家で笑ったり時にはケンカもした仲間が、その暮らした場所から居なくなる、というのは寂しいこ

とです。大人の思いを超える子ども同志の関係があります。それが薄らぐのではなく、新しい関係を創っていくよう祈るばかりです。

三人が佐藤家へ引越して九人の子どもたちと暮らしを始めた。とても心が細かく柔らかなで大人の対応がストリートに影響する高雄君です。そのことが私の思いから抜けてしまつと大変なことになります。今の高雄君をとて表現している出来事が起きました。

五月のよく晴れた日の朝早く、高雄君は外へ遊びに行つて家にはいませんでした。しばらくして隣の坂田さんの小母さんがやってきて、高雄君が田圃へ水をひく用水路で悪戯をしているので「止めなさい」と言っても止めず、おばさんが側まで行つて「ここはお米をつくる水を調節する大事な所だから、そんなふうにはしないで」と言つても一向に聞き入れません。大変悲しくなつておばさんは私たちに注意しに来て下さったのです。このことを聞いて驚きました。ちゃんと話を聞いて理解することのできる高雄君なのです。それ

なのに何故？

ニコニコ顔で朝ごはんを食べる高雄君を見ながら最近の様子を考えて見ました。やっぱりそうだとはいえなかった。最近、些細なことでもよく怒鳴られることが多かったことです。

高雄君は怒鳴られることに、変に慣れてしまい小母さんの注意すら聞き入れる心が麻痺してしまっていたのでしよう。

菅原先生が小母さんのお宅にお詫びに伺いました。高雄君にはとても悲しいことだと話しました。大人の対応ひとつで高雄君の細やかな心の壁を削り取ってしまった。叱ることを突きつけられました。叱ること、教えること、注意することなどと、怒ること、怒鳴ることとは何の関係もないことなのだと思えられた「事件V」でした。

子どもは大人の鏡のようです。そして、たくさん子どもたちから教わり、育てられている私です。いよいよキラキラと眩しい季節です。子どももキラキラと笑顔でいられますように。私もそうならなければ・・・ガンバロウ！

自立

その四 入野隆の場合2

菅原 哲男

養護メモ21

隆の入学の準備はかなりすんなりと運んでいた。隣り合う街で運送業を祖父と自営している父が祝い下さったランドセルを背負い「いちねんせいになったら」と、園庭を駆け回って喜び、日を数えながら入学を待っていた。父や祖父も隆の成長を喜び感謝し祝福していた。入学式には父が出席し、祖父もかけて祝ってくれた。申し分のない入学とそのスタートのように思えた。

こんな隆が、張り切っていた学校への意欲が急速に消沈していきうとは誰もが予想しなかったことなのであった。

四月八日が入学式。そして、四月十二日に学校から帰って帰った「ぬりえ」が見事にグチャグチャ塗りであった。それも、一度塗った上にまた別の色で塗りたくってあったのである。几帳面な性格をそのままきつちりと描き、はみだなどのない、配色も見事な「ぬり

え」が得意の幼稚園時代の隆からは考えられない「事件V」であった。担当の竹花はそれを「疲れた」と捉えて励ましながら対応していた。それもあつただろうが、一年生の子どもが、何もなければ翌日まで

に疲れが残る筈はないと考え、原因は他にもあると思っていた。登校の状態にそれが現れ出しのは、入学式のあった週半ばからである。どうも学校へ嬉々として出かける姿ではないのである。ガラガラ歩き、別の道へ逸れ、反対の方へ戻る。その度に班長を悩ませた。そんな登校に約一ヵ月同行した。隆たち新生が七名もいて、全校で二百人そこそこの小学校へ十九名も通っていたからでもある。

〇二十日には、朝七時にいつもより好調に登校した隆が、七時四十分には戻ってきた。「お腹が痛い」という。しばらくやりとりをしてトイレに行かせる。いい表情になつて「大丈夫」という。学校まで

自転車を送るといふ「イヤダ」

他の職員が車で送つてやると言うが、これも「イヤダ」・・・少し強い口調で促すと「オレ、学校休まないよ」と反転、張り切る。自転車を送り担任に事の次第を告げて託す。(ケース記録より)

〇五月八日の連絡帳には先生からの赤い文字がビッシリ。「たのしい字のペンきょう」のノートにふざけて書いたリ、クチャグチャに殴り書く、などなど・・・

〇十日、担任より電話で「隆が友だちを叩く。学習も気紛れ。一体どういう子どもなんですか」と。『どういふ子』について電話では尽くせない、面談を申し入れ、一時間半に及ぶ話し合いの中で、隆のいい点を見つけて評価して欲しいことを、入所して以来の私たちがのとりくみと隆の状況の変化と成長を具体的に説明して理解を求めた。ここに至るまで沢山たくさん試され、試さなかったら大人と向き合えない隆。新しい課題には必ず「イヤダ」と反応して自己防衛し、そして、あらゆることに「イヤダ」と言わないと次に出

れない隆。ちよつとでも誉められ評価されると自信にできる隆。結果、そのように努力して見ようと言つて下さる。(ケース記録)

こんな試行錯誤の連続が続く、六月半ばには担任教師には隆の面前で「こんな子見たことがない」と言われてしまったことも・・・

学校と担当者を中心とした光の子どもたちの努力を続けながら登校の状態など次第に改善されていく面と、教科書やノートを授業中にビリビリに破いたり、同じクラスに光の子どもの家の仙道家と佐藤家の子どもが三人いて、その子どもたちが先生に言いつけるなどエスカレートしていく部分とが錯綜しながら次々に現れた。

そんな状況の中で、父と家族、昨年から訪問を重ねていた隣町に住む母に生い立ちの不明な事を伺う、など協力を求めた。この中で、離婚になった原因の一つが消去されたことなどもあつて復縁を含めた家族の再生のかすかな可能性が見えてきた。母の来訪が四月の中旬頃から開始され、五月には週末帰省も始めた。この頃つづく

日誌抄

四月十六日
六月十五日

四月十八日 栗橋町のヒロさん

より沢山の「バン」を。感謝。

十九日 今関施設長がお話をする

機会があった県南婦人生活児童

委員の皆様が多額の献金。感謝

二十三日 栗橋町の島海さん、衣類

や飲み物などをたくさん。感謝。

二十五日 加須市周辺のボランティア

グループ「しずくの会」より

多額の献金。いつも・・・。

二十七日 渋谷さんより食品をたく

さんいただく。ありがとう！

二十九日 千葉県CS大会が礼拝献

金を持参して下さる。感謝。

○昨年度末から今年六月まで三人

の職員が辞める。そこで原田家

の創立以来の三人の職員の中か

ら秋元保母と三人の担当の子ど

もが、手薄になる佐藤家へ引越

して人数のバランスをとる。

五月一日 栗原さんよりお煎餅を、

江森理容店主調整奉仕。感謝。

四日 第三回子どもまつり。児童

福祉週間や憲法記念日をゴール

デンウィークだけにしないよう

意味を考え、規制を取り払って

自由に楽しく輝くように、と願

うお祭り。俄づくりのトーテム

ポールを立てて、ワッショイ！

十三日 第二百一十一回職員会議。

職員の退職に備えて手薄にな

る学習活動の補強のため大学等

へボランティアを要請し、夏休

みへ備えるなどを協議した。

十六日 「しずくの会」(会長梅

沢三保氏)が大塚17名で防風

林の植樹祭。草を取り、一輪車

で土を運び、シャベルで穴を穿

ち、二百本の榎の木が敷地北側

と西側に植えて下さる。十年た

ったら冬の風から守ってくれる

と。指導の帯津植木屋さんも、

みなさんも、ありがとう！

十七日 鈴木さんよりメロンなど

いただく。ありがとう。

十九日 いつもご支援の東洋英和

小学部の父母の会のみなさん見

学に。励まされる。

埼玉県社会福祉研修センターの

方々が見学とお励ましを。感謝。

二二〇二二日 児童福祉週間記念

第四回講演会を野崎中郎氏をお

迎えて第一部「ボランティア

と福祉事業」を。他の養護施設

から六名の参加がありました。

二六〇二七日 第二部を大阪譲治

先生をお迎えして「社会福祉の

動向と施設の役割」のご講演。

他の養護施設から七名の参加。

二七日 午後第十九回理事会。八

八年度の事業報告と決算報告の

審議と承認を。

二八日 特別に係を決めて光の子

どもの家の事業のために献金を

募り祈りに覚えて下さっている

緑星教会より多額のご支援の献

金。ありがとうございます。

二十九日 小学校家庭訪問がこの日

から。思いがけない子ども達の成

長や先生方のご苦心が・・・。

三一日 国際婦人福祉協会受領式

田中・今関理事出席し感謝を。

六月五日 町内の萩原さんより衣

類をいただく。感謝。

七日 越谷児童相談所より福祉司

二名来訪し情報交換やご指導を

十三日 熊谷児童相談所より三名

来訪し情報交換と困難な課題へ

のご助言・指導等をいただく。

○私たちの活動を支えるお励まし

に心から感謝しつつ・・・(くら)

反射光

台風が何回も来て

夏休みの行事に悩

んでいるうちに秋

の気配が子どもたちの表情や大人

たちの眼ざしに色どりを加ます☆

発行が大幅に遅れてしまい言い訳

の余地がありません☆高校生コン

クリート詰め殺人事件の記憶が生

々しいうちに少女連続誘拐殺人事

件の容疑者が逮捕され連日報道さ

れています☆子どもたちの育つ状

況を反映させて心寒い思いになり

ます☆子どもたちの育つ状況は大

人の意識や生活の反映でもありま

す☆宮崎勤を特別変わった人間に

してホッとしたのは私たち大人

なのではないでしょうか☆ファミ

コン・ビデオ・テレビが友だちの

子ども達の数だけ宮崎勤がいるの

ではないでしょうか☆子どもに関

わる大人の責任は免れようがあり

ません☆タカラクラブの皆さん、

倉沢ご夫妻、東大宮教会の皆さん、

新潟東中通り教会の皆さん、千葉

雅樹氏と駿東学園の皆さん、府川

ご夫妻、戸部ご夫妻、篤ご夫妻な

ど子どもたちの夏休みをありがた

うございました！心から。(哲)